

博士学位論文審査要旨

2019年1月31日

論文題目： 内発的発展論における主体に関する考察
—ネパールでの実証研究から—

学位申請者： 米川 安寿

審査委員：

主査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 峯 陽一

副査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 松久 玲子

副査： 経済学研究科 教授 八木 匡

要 旨：

本論文は、社会学者鶴見和子が1970年代に提唱した内発的発展論に依拠し、発展プロセスを担うキー・パーソン、すなわちコミュニティの仲間の一步先を歩む無名の指導者の役割を解明しようとするものである。学位申請者は、ネパールの農村をフィールド調査の舞台として、キー・パーソンをより詳しく性格づけようとする。そのために心理学者アブラハム・マズローの欲求階層理論を導入し、「キー・パーソンはマズローのいう自己実現的人間である」という仮説を設定した。

仮説を検証するために、申請者はネパールにおいておよそ150名を対象とする質問票調査(144名のデータを利用)、および5名のキー・パーソンを対象とする質問票・ライフヒストリー調査を実施し、統計学の手法により記述統計を提示し、さらに平均値および因子分析による各種変数の相関関係を求めた。独立性検定を行った結果、一般標本と対比すると、キー・パーソンは自己実現的人間としての特徴を備えているという結論が得られた。他方、かれらの自己実現性と学歴や経済状態とは明確な相関関係がないことが明らかになった。最後にライフヒストリー分析により、キー・パーソンたちは過去の人生において重要なターニングポイントを経験していることが確認された。そこで申請者はそのような変化を促進する「偶発的な出会い」を提供するような社会交流の環境が整備されるべきであると提案している。

論文は、内発的発展論の哲学を整理した第1章、開発倫理の問題意識を提示した第2章、心理学の手法と問題意識に切り込んだ第3章と第4章、調査地であるネパールの農村の状況をまとめた第5章、多角的な計量分析を行い、結論を導き出した第6章と第7章で構成される。統計分析の素材およびナラティブ記録をまとめた付録が加えられている。

欲を言えば、鶴見が問題提起したアニミズムについて、出会いの組織化の難しさについて、また社会的諸力の対立的な矛盾について、さらに突っ込んだ洞察があってもよかっただろう。しかし総合的に見て、関連する学知に対して本論文が非常に重要な貢献をなしていることは明らかである。これまでの内発的発展論に関する論考は、鶴見和子らが抽象度の高い理論を提示した後は、発展プロセスを客観的に観察し、可能であればモデル化しようとする実証研究が主流だった。しかし、自らネパールの養蜂業とかかわる社会的起業に従事していた申請者の論文は、実践的な観点から内発的発展をオペレーショナルライズしようとする試みであり、ここまで徹底したアクション・リサーチの手法を採用したものは、他の内発的発展論の研究には類例がないと思われる。定性研究と定量研究をバランスよく融合させることにも成功しており、後進に優れた範型を示している。執筆者が自ら集めた質問票データも一次資料としてきわめて貴重である。何よりも、統計

学、心理学、開発哲学の問題意識を結びつけながら、設定した仮説を科学的に証明することに成功し、政策提言にまでつなげた手腕は見事である。

以上より、本論文は、博士（グローバル社会研究）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

2019年1月31日

論文題目： 内発的发展論における主体に関する考察
—ネパールでの実証研究から—

学位申請者： 米川 安寿

審査委員：

主査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 峯 陽一

副査： グローバル・スタディーズ研究科 教授 松久 玲子

副査： 経済学研究科 教授 八木 匡

要 旨：

2019年1月18日（金）午後6時から7時30分まで、論文内容について多角的に質問し、申請者の学力を測る総合試験を行った。本学位論文は主として開発研究、統計学、南アジア地域研究の分野で評価されるべきものであるが、申請者がそれぞれの学問分野の方法論をしっかり身につけ、定性および定量データの収集と分析について十分な力を備えていることは、40分間のプレゼンテーションで証明された。また、それらの学力が十分な応用力とフィールドワーク経験に裏打ちされていることが、プレゼンテーションの後の50分間の質疑応答で明らかになった。申請者は多くの英語文献を参照し、現地調査もネパール語と英語で実施しており、申請者の多言語コミュニケーション能力と文献読解能力が十分に優れていることも詳細な質疑応答で証明された。よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 内発的発展論における主体に関する考察
—ネパールでの実証研究から—

氏名： 米川 安寿

要旨：

本論文は、日本の社会学者である鶴見和子が提唱した内発的発展論に関して、その実践面における可能性について考察したものである。特に、発展の中心を担うとされるキー・パーソンについての分析を行うことを目的としている。

内発的発展論は、社会の近代化に伴い問題となった南北の経済格差、南の貧困や地球環境問題を踏まえ、1976年に提案された理論である。西欧の近代化それ自身は西欧にとって内発的発展であったように、世界の他の地域にも独自の内発的発展があるとする点が特徴である。この理論では、内発的発展を牽引するキー・パーソンの存在が指摘されている。そして内発的発展論とは、こうした主体についての研究であるとされている。しかしながら、キー・パーソンの研究自体は体系的に整理されているわけではない。このため、内発的発展論の展開のために、キー・パーソン論の発展が一層必要である。

本論文では、上記の課題に対し、キー・パーソンがいかに誕生するのかという点に関心を払い、行動の源泉に注目することとした。そこでキー・パーソンを選定し、質問票調査及びライフヒストリーに関するインタビュー調査をネパールにて行った。キー・パーソンを考察するための調査仮説は、マズローの欲求階層理論からヒントを得て、キー・パーソンは自己実現的人間である、とした。このような仮説を設定した理由は、南の国々において活動する当地の人々と出会う中で、マズローの指摘する自己実現的人間の要素があると考えたことによる。この仮説を検証するため、質問票はマズロー理論を土台に作成された既存の研究の質問リストを元に構成した。そして、分析の結果キー・パーソンは確かに自己実現的人間であると判断することができた。自己実現的人間となった具体的背景の分析には、インタビュー調査の資料を活用した。その結果、キー・パーソンたちは人生で偶発的な出会いによるターニングポイントを経験し、これに伴い目的意識・価値観が生まれていたこと、また目標に向かって自己犠牲的な努力をしていたことを見出した。ターニングポイントでは、内発的発展論が重視する「外部との接触」が実際に起こり、人生に決定的な影響を与えていた。つまり内発的発展論の理論的要件に沿っていることも見出した。また、キー・パーソンとなった人々の学歴や家庭環境は様々であり、分析結果からも学歴や子供の頃の経済状態が重要なのではなく、「いかに出会うか」が要であったことが分かり、多様な出会いをもたらす環境が内発的発展のために必要であるとの結論を導いた。

第一章では、内発的発展論についての鶴見の考えを多角的に整理した。鶴見は、タ

ルコット・パーソンズの「先発国は内発的発展、後発国は外発的発展」という考えについて、西欧以外にも独自の内発的発展があるとする。その思想的な由来、信念の底流には、人々の宗教観・精神性への注目がある。さらに南方熊楠や今西錦司を引き合いに出すような、生物を含むアニミズム的な自然観に根ざすものがある。このような内発的発展論の多様な思想的側面に加え、理論的側面、また主体性についての言及や先行研究による内発的発展論の議論などを整理し、本論文の位置づけを示した。

第二章では、近年の開発倫理の議論を踏まえ、内発的発展論が開発倫理の中に位置づけられるものとして整理した。鶴見は、内発的発展論をアニミズムに依拠する動機付けの体系とし、これをプロテスタンティズムの倫理に対置させようとし、倫理という用語を使用している。開発倫理の議論もまた、開発による弊害を反省し、倫理学の視点から評価しようとして発展してきた経緯があり、社会の多様な価値を考慮しようとする。特に、開発の中で起こる価値衝突を評価すること、多様性を開発の枠組みにいかん反映させるかといった視点が議論される。つまり、開発倫理は価値や多様性の問題を扱う点で、内発的発展論の思考の枠組みに沿うものであり、倫理的な熟慮を必要とする今後の開発における内発的発展論の有効性、意義を示した。

第三、四章では、本論文で内発的発展を心理的な側面から調査を行うに当たり、これまでの開発の理論と実践における心理学の活用状況について整理した。また、内発的動機付けという観点から進められてきた心理学的な研究成果を整理した。開発事業において、主観に関わる心理学の利用はこれまで難しかったと考えられ、現場においては人々との心の交流があるにも関わらず、理論的な支柱にはならなかったと考えられる。しかし、20世紀後半になって主流アプローチになったエンパワーメントは、その原点が心理的な支援であり、その意味で開発にもすでに心理学の関与がある。最近になり、開発現場での心理学の活用手法をまとめた報告書が JICA (Japan International Cooperation Agency : 独立行政法人国際協力機構) から提出され、実践的活用も少なからず検討されていることが分かる。このような文脈から、今後心理に注意を払う必要性を確認したうえで、筆者が調査を実施するにあたり、心理学者マズローの欲求階層論に着目する根拠と内発的発展論との関連性を整理した。

第五章では、本論文の調査地であるネパールについて、調査分析の事前手続きとして社会経済状態などの一般的な情報を整理した。MDGs (Millennium Development Goals : ミレニアム開発目標) といった、国連の諸活動による開発の状況と、HDI (Human Development Indicator : 人間開発指数) や GDP (Gross National Products : 国内総生産) といった社会経済的側面からみたネパールの現状について整理している。また現在の対ネパール ODA (Official Development Assistance : 政府開発援助) から見た開発支援の状況から、今後の課題や展望についても整理した。ネパールは、MDGs 目標をかなりの程度達成したが、GDP でみると安定的な経済成長はしていない。しかしヒマラヤや熱帯ジャングル等の観光資源があり、また FAO (Food and Agriculture Organization of the United Nations : 国連食糧農業機関) 等の指標で見ると、食糧自給率は高いものがあり、自然資源の豊かさが見いだせる。歴史や文化、伝統の豊かな諸側面も含め、内発的発展にはよい条件であることを俯瞰的に示した。

第六章では、現地調査の報告をし、分析結果を整理した。現地調査では、筆者が選

んだ5名をキー・パーソンとし、質問票調査とインタビュー調査を行った。また、一般標本として144名に対し同様の質問票調査を行った。キー・パーソンは自己実現的人間であるという仮説の下、記述統計や相関係数分析、統計的検定を利用し、一般とキー・パーソンとの比較分析をしている。統計分析では因子分析を利用し、質問票における全質問を5因子に限定して分析したところ、マズローの欲求段階に沿った形で分類できることが分かり、質問票の有効性を確認した。そこで、さらに細かく因子分析を行ったところ、全体が11因子に分けられた。この中でも、承認欲求は「他者からの承認」「自尊心」に分けられ、自己実現欲求は「自己の価値実現」「自己受容」に分けられた。この4因子を比較分析すると、一般標本では、学歴が高いほど全体の満足度は高いが、自己実現欲求は必ずしもよく満足していなかった。これとは逆に、キー・パーソンの学歴はそれぞれ異なっているにもかかわらず、大人になってから自己実現欲求、承認欲求の満足度が全般的に高いことが分かった。この傾向を相関係数で見た場合、学歴と承認欲求には相関関係が強くみられたが学歴と自己実現欲求では強い関係が見られないことが分かった。また一般標本でキー・パーソンに近いと判断した標本は承認欲求の因子「自尊心」と自己実現の因子「自己受容」が高かったのに対し、キー・パーソンはそれに加えて承認欲求の「他者からの承認」、自己実現欲求の「自己の価値実現」も含めた4因子すべてが高いことが特徴であった。特に、「他者からの承認」「自己の価値実現」の満足は、キー・パーソンに固有の特徴であることが独立性検定で確認できた。以上から、キー・パーソンが自己実現的人間の特徴に従っていると判断した。また、そのような人間となった背景について、インタビュー調査から分析した結果、キー・パーソンには人生を変化させたターニングポイント—偶発的な出会い—という共通点があり、これがきっかけとなり、鶴見が指摘するような価値明示的な目標が生まれていたことが見出せた。このため内発的発展論の創造性には、子供時代の家庭環境や学歴によるよりも、個々人の価値や目標設定に繋がる「偶発的な出会い」が生まれる豊かな社会交流の場が重要であると考えられた。

第七章では、分析結果を心理学の研究成果から推論するとともに、本論文の結論を整理している。まず「偶発的な出会い」がもたらしたものについて、これまでの心理学の理論や研究成果からどう読み取れるのかを調べ推論を行った。この結果、キー・パーソンたちは人生のターニングポイントにおいて自己査定理論で重要とされる自己の能力を発見することができたのではないかと考えられた。これにより自己の成長につながる高い目標設定をなし得たのではないかとの示唆を得た。このため、「偶発的な出会い」は、個人にとって興味があり、「自らのできること」に関する目標との出会いであることが必要であるとの含意を見出した。本論文の研究からの含意として、内発的発展のためには、価値観や目標設定をもたらす「偶発的な出会い」に巡り合うことのできる社会交流の豊かな環境が必要であるとの結論を述べた。